

美食文化



老舗和菓子「森八」十九代目若女将 中宮 千里 (なかみや・ちさと) 略歴 2002年石川県立金沢商業高等学校卒業。2004年パンタン・デザイン・インスティテュート デジタルデザイン科卒業後、エディトリアルデザイン事務所勤務。2007年東京製菓学校 和菓子本科学入学、2009年卒業、株式会社森八入社。2010年取締役就任。現在、19代目若女将、チーフコンフェクショナー。2018年度全国和菓子協会の選・和菓子職「優秀和菓子職」の認定者として選ばれる。森八に職人として入社する以前は東京でデザイナーとして活躍。その経験を活かし、森八では商品開発やパッケージデザインも担当。

400年の伝統ある老舗の心構え “職人”若女将が考える地域との結びつき



大正7年に洗沢栄一翁が来社 (森八別館屋上にて)

愛情とこだわり、かつて専攻したデザインのこと、ものづくりへの思いを伺った。聞き手は早坂美都理事。森八の和菓子について教えてください。森八でもっとも有名な「長生殿」という落雁は、日本三名菓の一つに選ばれている大変由緒あるお菓子です。また、落雁のような干菓子のほか、生菓子もございいます。生菓子の代表である上生菓子は、季節を先取りすることが粋だと解釈され、デザインする時は、いま咲いている花や季節より少し先の景色を表現することが多いです。一つひとつ手作りのものを、もらった人がどんな気持ちになるか、選んでくれた人がど

んな気持ちで選んだのか、想像できるのが和菓子の良さだと思います。また、最近では春夏秋冬だけでなく、ハロウィンやクリスマスなど、元来、日本にはなかった行事が和菓子の世界にも入ってきています。和の文化だけを切り取るのではなく、新しいものを取り入れることも大切にしていきます。職人やスタッフをまとめる上で重要視していることと大切にしていることは、従業員やその家族も自分の家族だと思つて、みんなが幸せになれるよう仕事をしたい。長年商売をやっておりますと、なんらかの形で先相様が森八や金沢と関わつてくださったという方が多いです。「おばあちゃんの出身地が石川県で小さい頃よく食べていた」とか、「おじいさまが森八で働いていた」と、声をかけられたことがあります。長い歴史の中でお付き合いが増えていくと、金沢のみならずが家族のようになります。「森八のお菓子をあげたら喜ばれるよね」と、良い思い出につながるお菓子作りを大切にしている企業であるこ



日本三名菓のひとつ「長生殿」



上は「令和」記念生菓子、下は中宮千里氏創作の「加賀てまり」。森八では、職人一人ひとりが、お菓子をもらった方の良い思い出に繋がるように、日々研鑽し創作することを志している

とが大事だと思います。和菓子職人を目指したきっかけは、幼い頃から絵を描いたり、粘土細工をしたりするのが得意でした。小さい時から職人を間近で見ましたし、母や祖母も手先が器用で、子どもながらもものづくりに対して「素敵」「かっこいい」という印象を抱いていました。高校を卒業してからはグラフィックデザインの専門学校に通い、出版関係のデザインをしたこともあって、ものづくりに向ける思いがますます大きくなりました。東京で働きながら年齢を重ねるにつれ、故郷へ帰りたいと思つた時に、森八で和菓子職人として創

作することを志しました。和菓子作りのこだわりを聞かせてください。すべてのものに黄金比、基本配合は存在します。そのため必ずデータが必要で、お菓子にもこの湿度、気温でこういう炊き方をしたらパーセントでできあがるという理論があつて、そこから自分ならどうするか重要です。職人の勘とは、ただ直感的に作るのではなく、自分の中にあるデータに基づいて、素材の分量や技を微妙に変化させていくことだと思ひます。今でこそ数値で表しますが、昔の職人は1合を4分割にして、そこに砂糖を入れ替えるというようなやり方をしていました。それを数字に起こすのが現代の職人ですが、考え方としては昔から変わってはいないと思います。繊細な作業に神経を使うことも多くありそうですね。逆に疲れた時こそお菓子を作りたいと思います。仕事で歯がゆい思いをするこ

とめるといってしまふ。朝食食べて、その後、昼休みの前後に食事をまとめるようにして、エナメル質が修復される時間を長くするよう心がけています。口腔内が健康でないと味覚も変わります。私の場合、例えば海辺に行くとき塩味がする。日常で感じる味があります。また、竹串の焼き鳥と金串の焼き鳥とは何となく味が違うとか、そういうところを感じるのは大事だと思います。そうした感覚を大切にしたいので、毎月メンテナンスに通つています。本日は貴重なお時間をありがとうございました。

老舗和菓子「森八」へのお問い合わせ、アクセス等の詳細はHPをご覧ください 森八東京店 (神保町) https://www.morihachi.co.jp/shoplist



新春特別企画 会員投稿写真



本栖湖畔にある浩庵キャンプ場から臨む早朝の霊峰富士。還暦を迎えた記念に、大自然の中で密を避け、気持ちを新たに始めたソロキャンプ。空気は冷たく透き通り、明るい未来が感じられる美しい風景だった。(谷本 幸司/中央区)



長い長い参道を色とりどりの人々に揉まれて何時間も歩く。酷く疲れる年初の恒例行事だが、それが無いなら今年度は少々寂しくなる。新しい年が皆様にとってより良い年になりますよう。(矢島 昇悟/港区)